

第 6 回講義 (20120608)

§ 4 同一性言明の意味について (続き)

【先週の課題】

同一性は次の3つの性質を持った特殊な関係である。

反射的 $a=a$

対称的 $a=b \rightarrow b=a$

推移的 $(a=b \ \& \ b=c) \rightarrow a=c$

	反射的	対称的	推移的
①1 ? ?	○	×	×
①2 xはyの名前を知っている(*1)	○	×(可能)	×
①3 ? ?	○	×	×(可能)
①4 xは自分と同じくらいyを愛する	○	×(可能)	×(可能)
②1 xとyは夫婦である	×	○	×
②2 ? ?	×(可能)	○	×
②3 xはyの兄弟である(*2)	×	○	×(可能)
②4 xはyの友人である	×(可能)	○	×(可能)
③1 $x < y$	x	x	○
③2 ? ?	x(可能)	x	○
③3 xはyの中にある	x	x(可能)	○
③4 ? ?	x(可能)	x(可能)	○
④1 ? ?	○	○	×
④2 xとyは同じ言語を話す xとyは血がつながっている	○	○	×(可能)
⑤1 ? ?	○	×	○
⑤2 $x \leq y$	○	×(可能)	○
⑥ $x=y$ 、xの誕生日=yの誕生日 xはyの東にある、xとyは同時である	○	○	○

*1 xがxの名前知らない場合があるとすると、これはなりたない

*2 対称性 $a=b \rightarrow b=a$ と 推移性 $(a=b \ \& \ b=c) \rightarrow a=c$ が成り立つならば、反射性が成り立つ

* ? ? は例が思いつかなかったところです (思いついたら教えて下さい)

【§ 4の復習と再構築】

§ § 1 同一性条件意味論の説明

次の主張を「同一性条件意味論」と呼ぶことにしたい。

「 $A=B$ 」(の意味)を理解するとは、「A」と「B」の同一性条件を理解することである。

言い換えると、同一性言明の意味は、その同一性条件である。

そこで、「同一性条件を理解する」とは、どういうことかが問題となる。

まず、一般に言明は分析言明と総合言明に区別される。

(a) 分析的言明とは、意味だけによって真であるとわかる言明である。

(b) 総合的言明とは、意味と事実によって真であるとわかる言明である。

これにもとづいて、同一性言明を次の二つに区別できる。

(1) 分析的同一性言明とは、意味だけによって真であるとわかる同一性言明である。

(2) 総合的同一性言明とは、意味と事実によって真であるとわかる同一性言明である。

§ 2 、クワインの議論の吟味

(a)と(b)の区別については、クワインの批判があった。クワインは「経験論の二つのドグマ」において、分析的真理と総合的真理の区別を否定する。その仕方は、<何が分析的真理であるか>の基準が経験的であることを示すことであった。

(クワインは、この議論に基づいて、意味の全体論(個々の文が意味を持つのではなくて、理論全体が「経験的有意性の単位」であるという主張)を行うので、同一性言明の意味もまた理論全体の中で確定することになる。これの吟味は、まずクワインの分析/総合の区別の批判が正しいかどうかを、吟味にした後に行いたい。)

クワインは「意味だけから真であるとわかる分析的同一性言明」を、次の2つに分ける。

① 論理的に真である同一性言明 「独身者=独身者」

② 意味によって真である同一性言明 「独身者=結婚していない男」

私たちは、この二つをさらに次のように言い換えることができる。

③ 論理定項と量化子の意味論的規則によって、真である同一性言明

④ 個体定項と述語定項の意味の規約によって、真である同一性言明

ところで、同一性記号は、二項述語の一種である。しかし、これは「xはyを愛する」のような通常の二項関係ではなく、固体記号の内容に関係なく妥当する「主題中立的」なものである。それゆえに、これを「論理定項」として認める場合がある。同一性記号を論理定項としてみとめる述語論理は、「同一性を含む述語論理」(predicate logic with identity: IPL)と呼ばれる。(論理的に真であるとみなされてきた伝統的な主要な命題に、次のものがある。同一律、矛盾律、排中律)このことは、③と④の区別自体のあいまいさを示しているといえる。(クワインが主張したことは、③と④がともに経験的であるということであって、③と④の区別の否定ではない。しかし、われわれはクワインにならって、③と④の区別の否定を論証できるかもしれない。)

■クワインの帰結への反論の試み1: 同一律だけが意味論的規則である

確かにクワインの言うように、何が意味的規則であるかは、言語に相対的であり、意味論的規則の定義は経験的なものになる。では、「同一律だけが意味論的規則である」と考えて、「同一律は分析的に真である」と規約すればどうだろうか。

クワインから予想される応答: クワインならば、「何が同一律であるかもまた言語によって相対的である」と言うだろう。私たちは、同一律を定義するときに、何らかの言語によらざるを得ない。その意味で、同一律は言語に相対的であり、経験的である。

■クワインの帰結への反論の試み2: 同一律とタイプ/トークンの区別

$A=A$ が成り立つことは、タイプとトークンの違いを受け入れるならば、受け入れている。<もし $A=A$ のなかの「A」と「A」が同一タイプに属する異なるトークンであるならば、 $A=A$ が成り立つ。> タイプ(eg. 「x」)とトークン(eg. 「x」)の区別は、言語の成立の基本前提である。ゆえに、あらゆる言語において、同一律(eg. 「 $x=x$ 」)は成り立つことになる。

このことは、問答において明示的になる。「AはBですか?」と問われて、「AはBだろうか」と考えるとき、答えようとするものは、与えられた問いを考えているつもりである。つまり、問いの中の「A」と、それを受けて「AはBだろうか」と考えるときの「A」は同一であると考えている。現地人が「ガバガイ」というのを聞いて、うさぎが見えた時に「ガバガイ?」と問う野外言語学者は、現地人のいう「ガバガイ」と彼女が尋ねた「ガヴァガイ」が同一であると考えている。問答が可能であるた

めには、あるタイプの表現についてのトークンが繰り返されることが必要である。そして、それらのトークンが同じ意味を持つと考えているので、「A=A」や「ガヴァガイ=ガバヴァイ」が成り立つと考えている。

クワインからの予想される応答: これに対してクワインならば、次のように言うかもしれない。しかし、2つの発声で、同じタイプの発声であるかどうか(あるいは、2つの発声を、同じタイプの発声とみなすかどうか)は、言語に依存する経験的な事実である。そうだとすると「A=A」が成り立つかどうかはまた、言語に属する経験的な事実である。

注: 私的言語批判からのタイプ/トークン関係の考察

ワイトゲンシュタインは私的言語の不可能性を主張したとされている。彼の私的言語批判がどのようなものであるかについては、議論があるが、ここではつぎのような私的言語批判の論証を受け入れて議論したい。

- ①言語は、言語ゲームの規則(語の使用の規則)をもつ。(前提)
- ②私的言語とはある一人の人だけが理解している言語である。(前提)
- ③私的言語では、<規則に従っていること>と<規則に従っていると信じていること>の区別ができない
(②からの帰結)
- ④①と③は矛盾する

ここから③の前提である②の否定が帰結する。

私的言語では、<規則に従っていること>と<規則に従っていると信じていること>の区別ができない。もうすこし具体的に説明しよう。ある人が、ある痛みを感じた時にカレンダーに「E」と書き込むとする。彼が、その痛みを感じた時にまた「E」と書き込んだとしよう。このとき、この2つの「E」はある種類の痛みを表現するタイプ「E」の2つのトークンである。このとき、「E」は規則に従って、使用されているといえる。

このとき成立していなければならないことは次の二点である。

- ①2つの書き込み「E」が同一タイプの表現の2つのトークンであること
- ②2つの書き込み「E」が指示する対象(指示すると信じられている対象)が同種の対象(「似たような痛み」)であること

①についても②についても、私的な言語の場合には、それが<成り立つこと>と<成り立つと信じていること>の区別ができない。

①が成り立たなければ、言語ゲームが成立しない。

ゆえに、その対偶<言語ゲームが成立するならば、①は成り立つ>が成り立つ。

ところで、①が成り立つならば、「E=E」がなりたつ。

■クワインからの上記のような反論は、次の推論にもとづいている。

言語に関する規則そのものは、言語についての記述である。

言語についての記述は、経験的である

ゆえに、規則に関する規則は、経験的である

この推論は妥当である。この推論の二つの前提はただしいのだろうか？

(これについては、クリプキの議論を紹介・検討したあとで、戻りたい。)

§ § 3 クリプキの議論の検討 (2001ws 第一回講義ノートを参照)

(Kripke, Naming and Necessity, Blackwell, 1972 クリプキ『名指しと必然性』八木沢敬、野家啓一訳、産業図書、1985。以下の引用とページ数は邦訳からのもの)

Kripke は、「アプリアリ」と「必然性」を区別する。クリプキによると、「アプリアリ」は認識論の概念であり、「必然的」は形而上学の概念である。

1、Kripkeによる「アプリアリ」と「アポステリアリ」の区別

「アприオリな真理とは、いかなる経験にも依存することなく知ることができるものである」³⁸

ただし、私たちは、アприオリに知りうるものを、また経験的に知ることができる。たとえば、ある数が素数であることは、アприオリに知りうることである。しかし、そのことを計算機をつかって知るとき、「我々が、もしこの数が素数だと信じるならば、物理学法則やその機械の構造などの知識にもとづいて、それを信じるのである」つまり、経験的な証拠に基づいて知るのである(Cf.40)。

「アポステリオリな真理」とは経験に依存することによって知ることができるものである。

2、Kripkeによる「必然的」と「偶然的」の区別

物理的必然性と論理的必然性

物理的必然性は、ある世界での二種類の出来事の恒常的關係であり、認識論上の概念である。論理的必然性は、すべての可能世界で成り立つ出来事。(Cf. p. 40)

「2より大きな偶数は二つの素数の和でなければならないというのが、ゴールドバッハの推測である。もしこれが真ならば、おそらくそれは必然的であろうし、もし偽であれば、おそらく必然的に偽であろう。ここで、われわれは、数学の伝統的見解をとって、その推測は数学的実在の中で真か偽かのいずれかである、と仮定する。」⁴¹

クリプキは、数学に関して実在論をとっている。数学的命題の真理値は、私たちの認識からは独立しており、決まっている。

「われわれは、それ[ゴールドバッハの予想]が真か否かをアприオリに知ることが原理的にはできる、とおそらく主張されるであろう。確かに、できるかもしれない。もちろん、全ての数を調べることの出来る無限の知性ならばできる。またはできうるだろう。だが、有限の知性にできる、または出来るかどうかをわたしは知らない。」⁴²

<「ゴールドバッハの予想は真である」という命題が、真であれ偽であれ、それは必然的に真、ないし必然的に偽である>と言えるのだが、<「ゴールドバッハの予想は真である」という命題が、真であれ偽であれ、それはアприオリに真である、ないしアприオリに偽である>とはいえない。実在論をとるとき、ある命題が<必然的に真である>ことと、<アприオリに真である>ことの間にはこのようなズレが生じる。

結論:「したがって、言明に適用された「必然的」および「アприオリ」という述語は、明白な同義語ではない。」

(では、反実在論を採用すればどうなるのだろうか。数学に関して反実在論を採用すると、<Gの予想は、それないしその否定が証明されるまでは、真か偽がわからないだけでなく、真であるか偽であるか決まっていない>と考えることになる。このとき、<必然的真理>と<アприオリな真理>は一致する。たとえば、クワインは、「存在論的相対性」(何が存在するかは言語に依存する)という反実在論的な立場をとる。ウイゲンシュタイン、ダメットも、反実在論的である。この問題については、後に論じる。)

3 アプリオリ/アポステリオリと必然的真理/偶然的真理の組み合わせ

	アプリオリ	アポステリオリ
必然的	○	◎
偶然的	◎	○

○は、従来から認められている。◎は、従来は認められていなかったがクリプキがはじめてその存在を主張した。

■二つの区別が同義と考えられてきた理由

理由1: 従来は<必然的に真な命題は、アприオリに知られる>と考えられていた。

「第一に、もし何か現実世界でたまたま真であるのみならず、全ての可能世界でも真であるとしたら、頭の中で全ての可能世界を通覧することだけによって、われわれはしかるべき努力の末に、もちろん必然的な言明は必然的

であると知り、したがってアприオリであると知ることができるはずだ、という考えである。」43f
アприオリな真理ならば、必然的な真理である。

理由2: 従来は<アприオリに真と知られる命題は、必然的に真である>と考えられていた。

「第二の理由は、もし何かがアприオリに知られるならば、それは世界を探索することなしに知られたのだから必然的でなければならない、という逆の考えから来るものと私は思う。もし、それが現実世界の偶然的な特徴に基づいているとしたら、探査することもせずはどうしてそれを知ることが出来るのだろう。現実世界は、それが偽であるような可能性世界の一つであるかもしれないではないか。このことは、探査もしないで現実世界について知る方法があれば、それは同じことを全ての可能世界についても知る方法に他ならない、というテーゼに基づいている。」44

■「固定指示子」の定義

「諸可能世界にまたがる同一性」と呼ばれる概念が必要である。」

「ある言葉があらゆる可能世界において同じ対象を指示するならば、それを固定指示子(rigid designator)と呼ぼう。そうでない場合は、非固定(nonrigid)または偶然的指示子(accidental designator)と呼ぼう。もちろんわれわれは、対象がすべての可能世界に存在することを要求しない。・・・ある性質がある対象に本質的であると考えるとき、われわれは普通、その対象が存在したであろうどんな場合においても、その性質はその対象について真となる、といっているのである。必然的存在者を指す固定指示子は、強い意味で固定的と呼ぶことが出来る。」55

■固有名は固定指示子であり、確定記述句は非固定指示子である。

・「この講義で私が主張しようとする直観的なテーゼの一つは、名前は固定指示子であるというものである。」55

・単称確定表示句は、固定指示子ではない。

「たとえば「1970年のアメリカ大統領」はある特定の男、ニクソンを指示する。しかし、ニクソンではなく、他の誰か(たとえばハンフリー)が、1970年の大統領だったかもしれない。それゆえ、この指示子は固定的ではない。」

・「これ」「私」などの指標子も、固定指示子ではない。

<メートル原器の例>

「1メートルはSの長さであるとする、ただしSはパリにある一定の棒である」62

「棒Sはt0において、1メートルの長さである」

これらの言明はアприオリである。なぜなら、「1メートル」の定義だからであり、これの正しさを知るために、経験を必要としないからである。これらは、認識論的にはアприオリである。

「1メートル」が固定指示子であるとするれば、この言明は、形而上学的には、偶然的言明である。(「水は海水面では、摂氏100度で沸騰する」という言明も同様である。)これは、「偶然的でアприオリな真理」65の例である。

■指示を固定する定義と同義性を与える定義の区別

・例1: 「1メートルは、棒Sのt0における長さである」

「1メートル」は固定指示子である。「棒Sのt0における長さ」は非固定指示子である。1メートルが、これと一致することは偶然的である。ゆえに、「1メートルは、棒Sのt0における長さである」は、アприオリで偶然的な真理である。「1メートル」という固有名の指示を固定する定義である。

・例2: 「ニクソンは、1970年のアメリカ大統領である」

「ニクソン」は固定指示子である。「1970年のアメリカ大統領」は非固定指示子である。ゆえに、上の命題は、アприオリで偶然的な命題である。

・例3: 「 π は円周率である」

π は、ある実数の名前として使われており、しかもその実数は必然的に円周率なのである。「ここでは、「 π 」と「円周の直径に対する比」は両方とも固定指示子なのであり、それゆえメートルの場合になされた議論はあてはまらないことに注意しよう」(p. 69) 「 π 」も「円周率」も固定指示子である。ゆえに、「 π は円周率である」は「 π 」という固有名の指示を固定する定義である。これは、アприオリで必然的な真理である。

4、同一性言明の分類への適用

(1) 二つの記述句の同一性:アポステリオリで偶然的

「二重焦点眼鏡を発明した男がアメリカの初代郵政長官であった」は、偶然的に真である。116

二つの非固定指示子の同一性は、偶然的である。上に見たように、固定指示子と非固定指示子の同一性も、偶然的である。

(2) 固有名と記述句の同一性:アプリオリで偶然的

「オバマ=2012年のアメリカ大統領」

(3) 二つの固有名の同一性:アポステリオリで必然的な場合

「ヘスベラスは、フォスフォラスである」「キケロはタリーである」などは、二つの固定指示子の同一性であるから、必然的である。

(4) 二つの固有名の同一性:アプリオリで必然的な場合

「 π = 円周率」